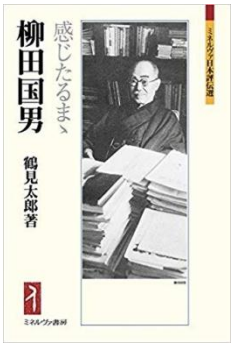
日本評伝選『柳田国男』

柳田国男『都市と農村』岩波文庫、2017 年は「朝日常識講座」第 6 巻として、朝日新聞社から 1929 年に刊行された。京都で開催されている定例研究会で報告する予定だったが、コロナ・ショックで延期になってしまった。報告を準備していたので「ショック」だった。



民俗学者・柳田国男の著作は、東日本大震災のあとに『遠野物語』を読んだぐらいだ。今回『都市と農村』をじっくり読み、なんだか引き込まれるものがあった。昨年 9 月にミネルヴァ書房から刊行された写真の鶴見太郎『柳田国男』日本評伝選の冒頭に、次のように書かれているので、抜粋して紹介したい。

草創期の日本民俗学を担った人物を評する時、物事を洞察する力においては折口信夫、型破りの知識量と記憶力においては南方熊楠の名前を挙げなくてはならないのに対して、柳田国雄は、志す者があれば、誰でも入っていける道筋を示したといえる。すなわち、柳田がいなければ、民俗学とは超人的な力量が先行する「技」のようなものと捉えられた可能性すらある。柳田は民俗学に限らず、文章の中で何度も自分の記憶、そして体験を描いている。しかもそれらは具体的な場所や人、そしてモノを介してひとつの風景を構成しており、それだけ映像的、感覚的である。個人の体験、記憶を織り込んだ記述が多くの読者にとって時代を隔てていながら、同時に読み手が共感できるものであること―柳田の仕事が読み継がれる理由はそこにある。

『都市と農村』において柳田は、「都鄙連続」の観点から両者の交流の健全なあり方を検討する。関東大震災以降、東京近郊の地域でも人口増加が目立ち始め、変貌する農村地帯がもたらす「都市」と「農村」の関係は、それまでにない身近な問題を生み出していた。柳田は自分こそ、この問題を論じるにたる書き手と考えて構成を行っている。まず、「茲に私といふ者が一人、今の都市人の最も普通の型、都市に永くすみながら都市人にもなり切れず、村を少年の日の如く愛慕しつゝ、しかも現代の利害から立ち離れて、二者の葛藤を観望する境遇に置かれて居たのである。私の常識は恐らくは多数を代表する」と自らの立脚点を定める。そしてかつて抱いた安定した農村のイメージを手許に、農政官僚時代の問題意識を都市と農村がせめぎ合う環境にもう一度置き直す。そこで強調されるのは、都市の圏内に入ることで土地を耕さず、地主となる層が増えたことで生まれる農村生活の動揺である。柳田は現金収入と引き換えに、そこに大きな喪失があったと指摘する。すなわち、「衣食住の材料を自分の手で作らぬといふこと、即ち土の生産から離れたといふ心細さが、人を俄かに不安にも又鋭敏にもしたのではないか」と、その背後にある、もはや戻ることのできない生活上の変化を読み取る。

（2020 年 5 月 15 日）